人間文化創成科学論叢　第16巻　2013年

大正期の『中央公論』『婦人公論』における外来語表記の特徴

石　井　久美子*

Notation of loanwords in *Chuou Koron* and *Fujin Koron* published in Taisho period

ISHII Kumiko

Abstract

The purpose of this paper is to introduce how loanwords were put down in writing in the Taisho period. Ten types of notation of loanwords consisting of a combination of kanji, katakana, hiragana and alphabet were observed in twenty-four volumes of general magazines published by Chuoukoron-sha, *Chuou Koron* and *Fujin Koron*. Out of ten types of the notation of loanwords, both these magazines had eight in common despite having had different writers, readers and ways of writing ruby character (small hiragana or katakana above the character).

The two major findings of the research are as follows. (1) The most frequently found form was katakana only, though the suitable notations depend on each semantic field of proper nouns and frequency in use of common nouns. (2) The notational styles of loanwords gradually shifted from kanji to kana from the middle of the Taisho period. Both (1) and (2) show katakana is useful for the writing of loanwords. These findings are in accordance with the then trend to simplify the notational systems. So it can be said that the notational style of loanwords late in the Taisho period underwent a simplification process from kanji to katakana.

Key words: the Taisho period, loanword, notation, *Chuou Koron*, *Fujin Koron*

1．はじめに

大正期は、外来語が日常に浸透し本格的に増加し始めた時期[1]だといわれながら、明治期や昭和期との繋がりの中での言及にとどまり、詳細に調査した研究は少ない。

外来語表記に関しては次のような先行研究がある。石綿（1989）は、外来語においてはルビの方が重要で漢字はアクセサリーだと述べ、また、大正頃に外来語の表記は大きく変わり、漢字で書くことが激減しカタカナが急増したと指摘する。明治期から昭和期の「東京日日新聞」６日間を調査した土屋（2000）は仮名表記語の増加の一因が仮名表記外来語の増加にあること、大正６年には外来語の漢字表記と仮名表記が拮抗していたことを指摘する。国立国語研究所（1987）は、明治39～昭和51年までの『中央公論』を10年ごとに調査している。その結果、外来語全体の増加とは逆比例して漢字表記が減り、仮名表記と漢字表記の両方が見られる語ではその出現数が1926（大正15・昭和１）年に逆転していると述べている。

外国地名の研究では、漢字表記と仮名表記の転換期について、明治28～昭和３年の『太陽』を調査した深澤（2003）は1926（大正15・昭和１）年だとしており、明治28～大正14年のうちの５年分の『太陽』を資料とする

キーワード：大正期，外来語，表記，『中央公論』，『婦人公論』

＊平成24年度生　比較社会文化学専攻

井手（2005）は1925（大正14）年の変化が際立っているとする。明治８～大正14年の新聞４紙を５年ごとに調査した山本（2009）は1920～1925（大正９～14）年で一気に漢字表記が減少すると述べている。

以上のように、先行研究では、漢字表記が減少し仮名表記が増加する転換期が大正期に位置していることが指摘されている。しかし、調査対象年のうち大正期にあたる分が２～３年にとどまっているものや、外国地名に限定されているものなど、その調査は部分的であり、大正期の外来語全体については明らかになっていないといえる。そこで、石井（2012）では、『婦人公論』の大正５、６、８、10、12、14年（計６号分）の公論の外来語を調査し、大正初期から末期にかけて、漢字表記から仮名表記へ、そしてルビのある表記からルビのない表記へと変化していることを指摘した。

本稿では、『中央公論』と『婦人公論』の各12号分に調査範囲を拡大し、両者を表記の面で比較する。それにより、外来語表記の特徴と変遷を示し、大正期の言語生活の一端を明らかにすることが目的である。

２．資料

『婦人公論』の創刊年（大正５年）に合わせ、『中央公論』と『婦人公論』の大正５～16年[2]の各１月号（計24号分）の「公論」に登場する外来語[3]を対象とした。分析範囲は、分量の少ない年と記事の切れ目を考慮し、各年65ページ前後とした。対象となる記事は、『中央公論』55件、『婦人公論』180件の計235件である。筆者は、『中央公論』が男性32人、不明２人[4]、『婦人公論』が男性69人、女性43人、夫妻１組、不明９人である。職業はいずれも学者、外交官、政治家をはじめとする知識人で、『婦人公論』では女性運動家や詩人、社長なども見られバラエティに富む。読者は、『中央公論』は知識人エリートである男性で、『婦人公論』は中流家庭の高学歴女性と、いずれも知識人だが性別が異なる。それが表記にも反映されており、『中央公論』は原則無ルビ、『婦人公論』は総ルビである。底本には、当時の表記を確認するために、『婦人公論』は雑誌そのものをPDFにした『DVD-ROM版婦人公論』を、『中央公論』は国立国会図書館蔵のマイクロ資料を利用した。

３．分析結果Ⅰ－表記形式の比較

３．１　外来語の表記形式

『中央公論』『婦人公論』の外来語を表記形式[5]でまず大きく三分する。（単）カタカナのみ、漢字のみ、アルファベットのみの「単表記形式」、（ル）外来語をルビに置いた「ルビ形式」、（併）各要素を同じ大きさの字で前後に並べる「併記形式」である。これら３形式に見られる字種を（漢）漢字、（カ）カタカナ、（ひ）ひらがな、（A）アルファベットとする。例えば「英吉利（イギリス）」については、「英吉利」の部分を本行、「イギリス」の部分をルビと呼ぶこととすると、ルビ形式で本行が漢字、ルビがカタカナであるため、「ル・漢カ」と表すことができる。このように分類記号を付けていくと、『中央公論』と『婦人公論』には表１（次ページ参照）の10種類の表記形式が見られる。以下、この分類を使用して分析を行う。3.2では『中央公論』の外来語の表記形式を、3.3では『婦人公論』の外来語の表記形式を扱い、3.4では両雑誌のアルファベットを含む表記に注目し、3.5では両雑誌に見られる外来語の表記形式の比較を行う。

３．２　『中央公論』の外来語の表記形式

『中央公論』の外来語は、ル・漢ひ、併・カ漢以外の８種類の形式が見られる。固有名詞と一般名詞の各表記形式の比率を示した表２（次ページ参照）を見ると、『中央公論』では、単・カが最も多く、単・漢がそれに続いている。

『中央公論』の固有名詞は表記形式が６種類と少なく、単・カと単・漢で二分している。地名では漢字を含む表記は、単・漢とル・漢カの２種に限られ、例えば「伊太利」「巴里」「君府（コンスタンチノープル）」「土耳其斯坦（トルキスタン）」などが見られる。単・漢は、一般名詞と比べて約６～７倍の比率となっており、「亞米利加」「獨逸」「佛蘭西」などの国名が多数を占める。人名は単・カの他に、単・Aの「Hobson」や、併・カAの「セリークマンSelikman」という例が

表1　『中央公論』『婦人公論』の表記形式

分類記号			本行	ルビ	用例
単	漢		漢字	—	亜米利加
単	カ		カタカナ	—	トルストイ
単	A		アルファベット	—	America
ル	漢	カ	漢字	カタカナ	英吉利（イギリス）
ル	漢	ひ	漢字	ひらがな	印度（インド）
ル	A	カ	アルファベット	カタカナ	jalousie（ジャルシー）
併	漢	A	漢字*	アルファベット**	商工主義commercialism
併	カ	漢	カタカナ	漢字**	マンモス（巨象（きょぞう））***
併	カ	A	カタカナ	アルファベット**	「ジェラシー」Jealousy
併	A	漢	アルファベット	漢字**	pugnacity（敵抗心、奮闘心）

*　併記形式で漢字＋アルファベットというのは、翻訳漢語＋アルファベット表記の原語という組み合わせに限られていた。そのため、用例の「商工主義」は翻訳漢語であり、音訳漢語ではないが、字種に注目し用例を挙げた。なお、翻訳漢語のみのものは採らなかった。
**　ルビではなく併記であるが、副次的表記として捉え、ルビの欄に入れた。
***　併記形式でカタカナ＋漢字というのは、『婦人公論』にしか見られない形式であった。『婦人公論』は全体が総ルビの文であるため、用例の漢字部分に当たる「巨象」にはルビが振られており、調査範囲内にはこのパターンしか見られなかった。

見られる。書名は単・カの他に、単・Aの「Neue Zeit」、ル・漢カの「歐洲植民史（ユーロピアン・コロニース）」、併・漢Aの「總べての鍵 Clavis universalis」という例が見られた。

『中央公論』の一般名詞の表記形式は8種類である。単・カが最も多く、続く単・漢は他形式から抜きんでて多いわけではない。ルビ形式や併記形式をとる語には1回限りの使用のものが多い。『中央公論』ではル・漢カは「観光客（ツーリスト）」「歸結（コンセクエンス）」などの翻訳漢語を当てた例が見られ、「珈琲（コーヒー）」「噸（トン）」のような音訳漢語を当てた例は1つもない。また、「直接民主主義（ダイレクト、デモクラシー）」「社會的臺所（コンミュニティキッチエン）」のように2つ以上の語からなる例が多いことが特徴的である。無ルビの文章の中でルビを付けるのは、原語に近いカタカナ表記と翻訳の漢字表記を一度に表示することで、政治や社会を論じるにあたりキーワードとなる抽象的な語を、意味と音の両面から補完できるためだといえる。

3．3　『婦人公論』の外来語の表記形式

『婦人公論』の外来語には、表1に挙げた10種類全ての形式が見られる。表2を見ると、単・カが最も多く、ル・漢カが続く。この2つの形式が最も多いという結果は、石井（2012）と一致する結果であり、調査範囲を拡大しても同様であることが確かめられた。これは『婦人公論』が総ルビであることが影響していると考えられる。アルファベットを用いる場合は、ルビ形式よりも併記形式が用いられており、併記形式の中でも漢字やカタカナを前に、アルファベットを後に置く形式が多い。

表2　『中央公論』『婦人公論』の各表記形式の比率

	中央公論		婦人公論	
	固有名詞	一般名詞	固有名詞	一般名詞
単　漢	42.6%	6.4%	0.5%	0.1%
単　カ	55.9%	74.2%	86.0%	76.3%
単　A	1.0%	6.0%	0.0%	2.6%
ル　漢　カ	0.2%	6.2%	11.8%	14.4%
ル　漢　ひ	0.0%	0.0%	1.0%	0.8%
ル　A　カ	0.0%	0.5%	0.0%	0.8%
併　漢　A	0.1%	4.0%	0.2%	2.8%
併　カ　漢	0.0%	0.0%	0.0%	0.5%
併　カ　A	0.1%	0.3%	0.5%	1.0%
併　A　漢	0.0%	2.4%	0.0%	0.7%

『婦人公論』の固有名詞は6種類の表記形式が見られる。地名と人名と書名については、3種類とも全て単・カが見られ、次に多いル・漢カは地名が多い。2つの多用形式以外に次の4つの形式が見られる。単・漢やル・漢ひの形式では「諾威」「印度（いんど）」などの地名、併・カAでは「デカルトDescartes.」などの人名、併・漢Aでは「人類生來論（じんるいせいらいろん） The Descent of Man.」などの書名が見られる。このように地名、人名、書名などの意味領域の違いが表記の違いと密接に関係している。人名にはル・漢カの「沙翁（シエイクスピア）」、ル・漢ひの「馬太（またい）」、書名にはル・漢

カの「美髪法（ヘーアカルト）」という例も見られたが、用例数の限られた例外的な表記であった。

『婦人公論』の一般名詞は10種類の表記形式全てが見られる。最も多用された単・カでは「パン」など繰り返し使われている具体的な語が多く見られる。意味領域としては、『分類語彙表 増補改訂版』の1.4生産物および用具に属する語で、住居の「バラック」、衣料の「マント」、飲料の「アルコホル」、資材の「チューブ」などが挙げられる。次に多用されたル・漢カは「表徴（シンボル）」などの抽象的な翻訳漢語を付した１回限りの使用のものが多く見られる。意味領域としては、『分類語彙表　増補改訂版』の1.1抽象関係（「動因（モーテイヴ）」「溝渠（ギヤツブ）」など）に該当するものである。事物を伴い出現頻度の高い語はカタカナのみで示され、抽象度が高く出現頻度の低い語には漢語が付され意味がわかりやすくなっているのである。また、『中央公論』の一般名詞にはない形式が２種類見られる。ル・漢ひでは「羅紗（らしや）」「煙草（たばこ）」など受容時期の早い外来語や、照明や燃料として知られていた「瓦斯（がす）」という用例が見られる。「瓦斯（がす）」は、本稿の調査範囲内ではカタカナ表記よりも漢字表記が優勢である。これらは、音訳の漢字表記がすでに定着した語であり、総ルビの文章であるために漢字にひらがなルビが振られてこのような表記になったと考えられる。併・カ漢では「エープマン（猿人（ゑんじん））」「クレーニヒ（婦人科教室（ふじんくわけうしつ））」などカタカナを中心とし、漢字で注を添える例が見られた。外来語を優勢とし、当てている漢語も日常生活では使われない語であるため、外来語と漢字とその漢字の読みを一度に表示できるこの形式が採られたと考えられる。

３．４　『中央公論』と『婦人公論』のアルファベットを含む表記

『中央公論』と『婦人公論』の一般名詞に共通して見られる表記に、アルファベットを含む語（単・A、ル・Aカ、併・漢A、併・カA、併・A漢の５種）がある。アルファベットは原語を表示するために用いられている。単・Aは、『婦人公論』では「女（をんな）（femina）」は「fe」と「Minus」からなるという解説に使われている例が見られ、『中央公論』では、「Injunction」や「Influenza」のほか、「“Antumunus”」（石井注：ラテン語で秋のこと）のように原語を示した例などが見られる。これらは外国語のままの表記であるため、日本語に取り入れられたという意味では「外来語」とは一線を画すものである。しかし同時に、「Kultur主義」のように漢語との混種語になっている例があり、一概に排除はできない。アルファベットだけでなく、カタカナルビを付しているのがル・Aカである。例えば、『婦人公論』では「英語（えいご）ではworld-sorrow（ウオールド ソロー）、ロシア語（ご）ではtoska（トスカ）と云（い）つてゐる」のようにカタカナで読み方が付されている例があり、『中央公論』ではサンスクリット語で「色を塗る」という語の語源を示すのに「Li（リー）」という表記が用いられている。いずれもある言語における言い方を示す用法にとどまるが、単・Aに比べ、原語を重視しながらもカタカナルビによって日本語の体系に沿う読み方を示した表記となっている。原語を重視する表記としては他に、併・A漢の「Man（男（をとこ））は、Man（人間（にんげん））だが、Woman（女（をんな））はMan（人間（にんげん））でない」（『婦人公論』）というように、アルファベットを前に置いた表記がある。アルファベットを補足的に用いる例には、併・漢Aや併・カAがある。『婦人公論』でも「愛（あい）Love.」「告白（こくはく）（confessio）」「エムヴイーEnvy.」など、『中央公論』でも「共同聯盟Commonwealth」「營利主義Erwerbsprinzip」「ゲロコミイGerokomy」（石井注：養老長生法のこと）など抽象度の高い語の原語の表示に用いられている。

以上のように、アルファベットは外国語そのままともいえるが、単表記形式でも混種語として使用されることや、ルビ形式や併記形式という二重表記によって読み方や意味と合わせて示されることにより、日本語に取り入れられているといえる。

このアルファベットを含む表記は、筆者に注目すると、男性筆者のみが用いており、女性筆者は用いていない。女性筆者は具体的な語の使用が多く、「ロシア語（ご）ではtoska（トスカ）」や「Man（男（をとこ））は、Man（人間（にんげん））」といった原語の表記を示す必要のある文章が見られないことが理由の１つである。一方で、併記形式ではカタカナや漢字の部分だけを選択して表示することもできるため、アルファベットを含む表記が男性筆者に集中するのは特徴的だといえる。

３．５　『中央公論』と『婦人公論』の表記形式の比較

これまでの調査分析を踏まえて、『中央公論』と『婦人公論』の表記形式を比較すると、表３のようにまとめられる。

まず、ルビの有無という文章全体の表記の影響なく見られる特徴を中心にまとめると、全体としてカタカナ表

記が最も多い。頻出の地名を除いてはルビ形式や併記形式は１回限りの使用のものが多い。固有名詞では、両雑誌に共通する例からわかるように、それぞれの意味領域で、用いられている表記形式が異なっている。固有名詞のうち、地名、人名、書名に注目すると、地名は漢字表記、カタカナ表記、漢字と仮名のルビ形式で表記され、アルファベットや併記形式は用いられない。人名はカタカナ表記と、カタカナ＋アルファベットの併記で表され、漢字を用いたルビ形式は例外的である。書名はカタカナ表記、本行漢字＋ルビカタカナ、漢字＋アルファベットの併記が用いられる。一般名詞ではカタカナ表記が最も多いが、固有名詞より表記のバラエティに富む。アルファベットを含む表記では、原語を重視するか補足として用いるかによって表記形式が使い分けられている。

個々の雑誌の特徴は次のようにまとめられる。『中央公論』は無ルビのため、ルビ形式はあまり登場せず、本行漢字＋ルビカタカナでは本行は翻訳漢語に限られ、代わりに、漢字やアルファベットの単表記が多用されている。それに対し、『婦人公論』は総ルビであるため、本行漢字＋ルビカタカナが多く、本行漢字＋ルビひらがなも見られる。

表３　『中央公論』と『婦人公論』の表記形式の比較

		『中央公論』	共通	『婦人公論』
多用形式		漢字のみ	カタカナのみ	本行漢字＋ルビカタカナ
固有名詞	地名		カタカナのみ 漢字のみ 本行漢字＋ルビカタカナ	本行漢字＋ルビひらがな
	人名	アルファベットのみ	カタカナのみ カタカナ＋アルファベットの併記	本行漢字＋ルビカタカナ 本行漢字＋ルビひらがな
	書名	アルファベットのみ	カタカナのみ 本行漢字＋ルビカタカナ 漢字＋アルファベットの併記	
一般名詞			カタカナのみ 漢字のみ アルファベットのみ 本行漢字＋ルビカタカナ 本行アルファベット＋ルビカタカナ 漢字＋アルファベットの併記 カタカナ＋アルファベットの併記 アルファベット＋漢字の併記	本行漢字＋ルビひらがな カタカナ＋漢字の併記

ここまで、『中央公論』と『婦人公論』で98％を占める名詞を中心に見てきた。名詞では表１に挙げたような10種類の表記形式が見られる。他品詞を見ると、数としてはカタカナ表記が最も多く、現れる表記形式の種類は少なくなっている。雑誌別に示すと、『婦人公論』では、動詞は「アツピールする」「モーダンがる」「捨象（アブストラクト）して」など、形容動詞は「ロマンテツクな」「新鮮（フレツシユ）な／フレツシな」などが見られ、カタカナ表記と、本行漢字＋ルビカタカナの２形式に集中している。『中央公論』では、動詞は「ペーブされた」（石井注：「舗装された」の意味）や「refineする」などカタカナ表記とアルファベット表記の２形式に、形容動詞は「アカデミツクな」「原始的（プリミチーヴ）な」などカタカナ表記と本行漢字＋ルビカタカナの２形式に限られている。『中央公論』でも『婦人公論』でも、動詞、形容動詞の中には現代の国語辞典の見出しにはないような「refineする」「ペーブされた」「デペンドして」（石井注：dependの意味）「サイクリカルな」などの語が含まれている。勝屋英造編『外来語辞典』（大正３年）で引くと、「リファイン」というカタカナ表記や、「ペーヴメント」「デペンダンシー／デペンデンシー」「デペンタンス／デペンデンス」「デペンダント／デペンデント」「サイクル」といった派生語が見つかる。このことから、当時は辞典に載るような規範的な語で、訳語を付すことなく理解される語であったといえる。このように、名詞以外の品詞の語は主にカタカナ表記され、派生語も多く見られる、定着度の高い語だということがわかる。

4．分析結果Ⅱ－表記の変遷

前項で大正期全般の表記的特徴が明らかになった。次は固有名詞と一般名詞の表記を年別に調査し、表記の変遷を明らかにしたい。分析にあたり、表１に挙げた表記形式を、カタカナを含む表記と、漢字を含む表記と、その他の３種類に分けた（表４参照）[6]。

表４　カタカナを含む表記と漢字を含む表記

カタカナを含む表記	漢字を含む表記	その他
カタカナのみ 本行アルファベット＋ルビカタカナ カタカナ＋アルファベットの併記	漢字のみ 本行漢字＋ルビカタカナ 本行漢字＋ルビひらがな 漢字＋アルファベットの併記 カタカナ＋漢字の併記 アルファベット＋漢字の併記	アルファベットのみ

カタカナを含む表記と漢字を含む表記に焦点を当て、4.1では『中央公論』の表記の変遷を、4.2では『婦人公論』の表記の変遷を述べる。

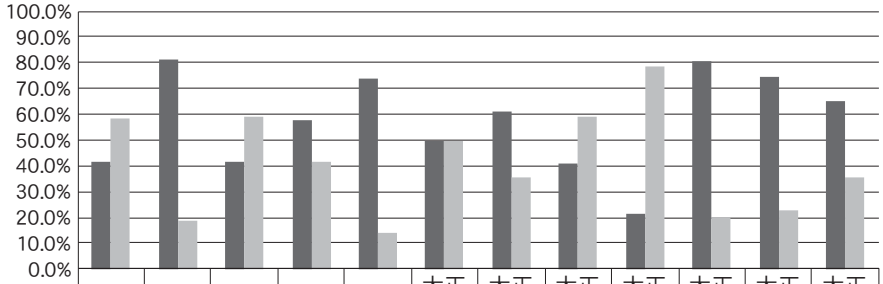
その他に挙げたアルファベットのみの単表記は、固有名詞では、大正９年の『中央公論』で「I・W・W」（石井注：Industrial Workers of the World、世界産業労働組合のこと）が多用されているのを除いて、『婦人公論』では全く見られず、『中央公論』でも各年４％未満と割合が低い。一般名詞は、『婦人公論』では４号分にしか登場しないが、『中央公論』では10号分に見られ、その割合は大正後半になるにつれ減っている。

４．１　『中央公論』の表記の変遷

『中央公論』の外来語を固有名詞と一般名詞に分けて調査すると、図１[7]に見られるように、固有名詞は年によってばらつきが大きいことがわかった。大正５、７、12、13年の４号分で、漢字を含む表記がカタカナを含む表記を超えており、その原因は地名の漢字表記を好んで使用する筆者がいるためである。大正12年５月２日に臨時国語調査委員会が発表した常用漢字表の凡例に「二、固有名詞ニハ本表ニナイ文字ヲ用ヰテモ差支ナイ。タゞシ外國（支那ヲ除ク）ノ人名地名ハ假名書スルコト。」とある。大正後期には地名は仮名書きする方向に定められているが、現実には漢字表記も多く使われていたことがわかる。

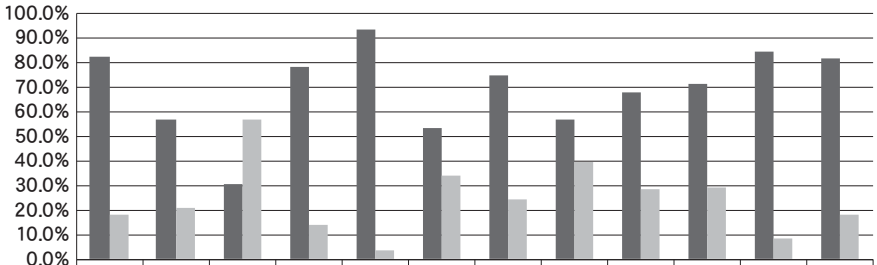
『中央公論』の一般名詞は、図２のとおり、大正７年を除いてカタカナを含む表記が漢字を含む表記を上廻っている。大正７年は外来語の総数が少なく、その中で「社會結合solidarity」などの漢字＋アルファベットの併

図１　『中央公論』の固有名詞の表記



	大正5	大正6	大正7	大正8	大正9	大正10	大正11	大正12	大正13	大正14	大正15	大正16
カタカナ	41.3%	81.2%	41.3%	57.5%	74.1%	49.8%	61.2%	40.9%	21.2%	80.2%	74.8%	64.8%
漢字	58.7%	18.8%	58.7%	41.7%	14.0%	49.8%	35.3%	59.1%	78.8%	19.8%	22.8%	35.2%

図２　『中央公論』の一般名詞の表記



	大正5	大正6	大正7	大正8	大正9	大正10	大正11	大正12	大正13	大正14	大正15	大正16
■カタカナ	82.1%	56.7%	30.4%	77.9%	93.3%	53.4%	74.3%	56.3%	67.3%	71.1%	84.4%	81.2%
■漢字	17.9%	20.9%	56.5%	14.3%	3.6%	34.2%	24.3%	39.4%	28.6%	28.9%	8.2%	17.8%

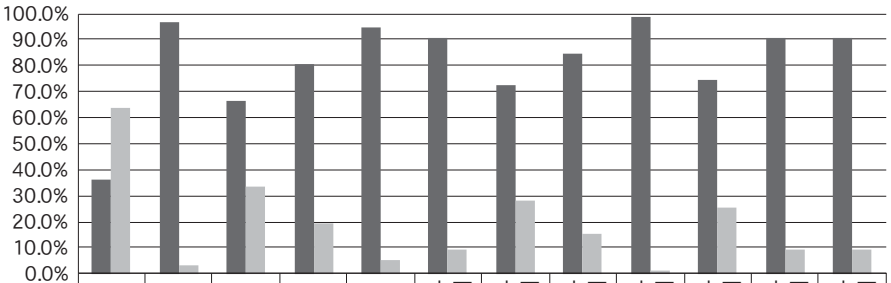
記という形式が多用されたことが逆転の原因である。大正10年頃から大正16年にかけてカタカナを含む表記の割合が増加し、漢字を含む表記の割合が減少している。大正後期の「プロレタリア／プロレタリヤ」「ブルジヨア／ブルジヨワ」「デモクラシー／デモクラシイ」など当時隆盛だった民主主義運動のキーワードであるカタカナ表記語の多用が原因と考えられる。

４．２　『婦人公論』の表記の変遷

次に、『婦人公論』の外来語を固有名詞と一般名詞に分けて調査した。その結果、図３からもわかるように、固有名詞は、大正５年にはカタカナを含む表記が36.4%、漢字を含む表記が63.6%と、漢字を含む表記が上廻っていた。それが逆転し、大正７年にはカタカナを含む表記が66.7%、漢字を含む表記が33.3%となり、多少ばらつきはあるものの大正16年までそれ以上差が縮まることはなかった。国名に焦点を当てると、大正５年には、カタカナ表記は人名ばかりで国名は見られなかったが、大正９年頃を境に、カタカナを含む表記が漢字を含む表記を上廻るようになる。この結果は、山本（2009）での、大正９年から大正14年で外国地名漢字表記の全体数は一気に減るという指摘と一致する。カタカナ表記へと移行する過程が本稿のデータにも表れているといえる。

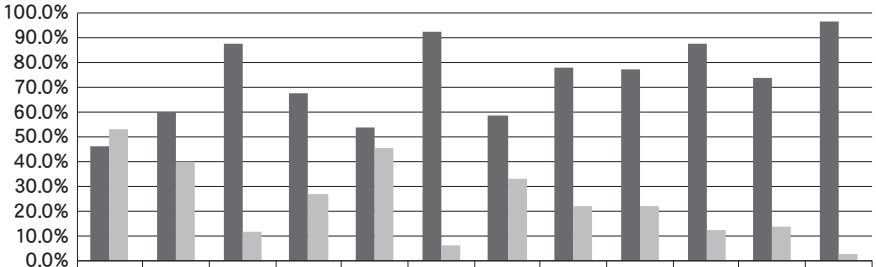
『婦人公論』の一般名詞は、図４のとおり、大正６年以降、カタカナを含む表記が漢字を含む表記を上廻っている。多少のばらつきはあるものの、漢字を含む表記が減り、カタカナを含む表記が増えており、大正11年頃からはその傾向が明らかである。大正７年と大正10年にカタカナを含む表記が特に多いのは、大正７年は「今の若い女の身のたしなみ」という記事で複数の筆者が「ピアノ」（14例）を挙げているためであり、大正10年は漢字を含む語が「噸（トン）」「哩（マイル）」など６例にとどまり、「サフラヂエツト／サフラゼツト」「トスカ」「デカダン」「プロパガンダ」など繰り返し使われるカタカナ表記語が多いためである。

図３　『婦人公論』の固有名詞の表記



	大正5	大正6	大正7	大正8	大正9	大正10	大正11	大正12	大正13	大正14	大正15	大正16
■ カタカナ	36.4%	96.7%	66.7%	80.5%	94.5%	90.8%	72.2%	84.9%	98.6%	74.5%	90.5%	90.5%
■ 漢字	63.6%	3.3%	33.3%	19.5%	5.5%	9.2%	27.8%	15.1%	1.4%	25.5%	9.5%	9.5%

図４　『婦人公論』の一般名詞の表記



	大正5	大正6	大正7	大正8	大正9	大正10	大正11	大正12	大正13	大正14	大正15	大正16
カタカナ	46.7%	60.0%	87.8%	67.6%	54.2%	92.3%	59.0%	77.8%	77.6%	87.4%	74.0%	96.9%
漢字	53.3%	40.0%	12.2%	27.0%	45.8%	6.6%	33.3%	22.2%	22.4%	12.6%	14.0%	3.1%

各先行研究で示されていた転換期は大正末年が中心であったが、固有名詞も一般名詞もそれよりも前倒しの結果となった。本稿のデータにおいても、大正期前半は漢字とアルファベットの併記を好んで用いる筆者や、「ストーヴ」「瓦斯（がす）」が集中的に用いられる記事など、個々の記事の特徴による表記のばらつきが大きかったのが、大正期後半になるとカタカナを含む表記の方が圧倒的に多いという結果となっている。各年のデータを取ったことによって、漢字表記からカタカナ表記への移行が観察できる結果を得られた。

以上の結果を固有名詞と一般名詞に焦点を当ててまとめると次のようになる。固有名詞は、『中央公論』では大正末までばらつきがあるが、『婦人公論』では大正７年頃を境にカタカナを含む表記が漢字を含む表記を常に上回っており、その差が縮まることはなかった。そして、一般名詞は、『婦人公論』も『中央公論』も大正後期になると、カタカナを含む表記の比率が高くなり、漢字を含む表記の割合が低くなっていくことがわかった。

５．まとめ

本稿では、大正期の『中央公論』と『婦人公論』を資料に、それぞれの表記的特徴と変遷を見てきた。98％を占める名詞を中心とし、固有名詞と一般名詞に分け、それぞれの特徴を明らかにした。

大正期全体の外来語の表記状況は、ルビの有無や雑誌の違いに拘わらず、カタカナのみの表記が最も多くなっていた。固有名詞では、地名、人名、書名というそれぞれの領域で表記形式の使い分けが確認された。地名は漢字表記、カタカナ表記、漢字にカタカナルビの形式で表記され、人名はカタカナ表記や、アルファベットとの併記で表され、書名はカタカナ表記のほか、翻訳の漢字表記に対して、ルビの場合はカタカナ表記、併記の場合はアルファベットを用いる例が見られた。そして、一般名詞は固有名詞より表記のバラエティに富んでいた。カタカナ表記が最も多く、ルビ形式や併記形式は１回限りの使用であるものが多かった。

個々の雑誌の特徴は次のようにまとめられる。『中央公論』は無ルビのためルビ形式は少なく、漢字やアルファベットの単表記が多用されている。それに対し、『婦人公論』はカタカナルビが多用され、特に、ひらがなルビと、カタカナ＋漢字の併記形式が使用されていることが特徴的であった。

年別に見ると、漢字を含む表記が減少し、カタカナを含む表記が増加しており、漢字からカタカナへの移行過程が見られた。大正期前半は一般名詞も固有名詞もばらつきが大きいが、一般名詞では大正期半ば以降、漢字を含む表記とカタカナを含む表記の比率の差が開いていくのが確認できた。固有名詞は、『中央公論』では大正末までばらつきがあるが、『婦人公論』では大正期半ばからカタカナを含む表記が優位になることがわかった。

以上のように、大正期の『中央公論』と『婦人公論』を資料に外来語の表記を調査分析することで、急増期の外来語がどのように表記されていたのかが明らかになった。表記の種類は全体で10種類見られるが、雑誌全体の表記との関係やその語の意味領域によって使用される表記に偏りがあり、使い分けられていることがわかった。最も多く見られたカタカナ表記は、漢字に置き換える音訳や翻訳に比べれば労力は小さく、外来語の急増を促したといわれるが、他の表記に比べて偏りなく使用でき、汎用性が高い表記であるともいえる。そして、『中央公論』

と『婦人公論』においてカタカナ表記が増加しているという結果は、筆者も読者も知識人であり公論という硬い文章であるという条件においても、明治期までの漢字・漢語を中心とする用字意識から変化が起きていることを明らかにしている。また、先行研究の抽出調査では大正期に順調に漢字表記が減少しカタカナ表記が増加したように見えていたが、その内実は媒体や筆者、テーマによるばらつきのある時期を経過した上での移行であることが確認された。

今後は、『中央公論』と『婦人公論』を対象に、語構成について調査分析を行い、和語や漢語との関係の中で大正期の外来語の語彙的・表記的特徴を考察していきたい。

【註】

1　橋本和佳（2010）『現代日本語における外来語の量的推移に関する研究』ひつじ研究叢書〈言語編〉第86巻、ひつじ書房、P.76

2　大正15年12月25日に元号が昭和に改まったため、大正16年１月１日発行となっており、その表記を尊重した。

3　外来語は全ての表記を対象とした。ただし、「台湾」「上海」など原語が漢字表記のものや、「英国」「英」などの略称は本稿では対象外とした。

4　不明としたのは、性別の調べがつかなかった人物である。

5　先行研究では漢字と仮名の対比が注目され、ルビやアルファベットは調査対象から外されることも多く、併記形式についてはほとんど言及されてこなかったが、当時のバラエティに富んだ表記状況を把握するために全てを対象とする。

6　本行漢字＋ルビカタカナ、カタカナ＋漢字の併記には漢字とカタカナの両方が含まれるが、漢字を伴うかどうか、という点を重視したため、ここでは、漢字を含む表記として数える。

7　カタカナと漢字の対比を目的としているため、「その他」を含めて100%として計算しているが、図１～図４では「その他」の掲載を略した。

【参考文献一覧】

石井久美子（2012）「大正期の『婦人公論』における外来語表記の変遷」お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科『人間文化創成科学論叢』第15巻

石綿敏雄（1989）「外来語の表記」『漢字講座第４巻漢字と仮名』明治書院

井手順子（2005）「外国地名表記について―漢字表記からカタカナ表記へ」『国立国語研究所報告22　雑誌『太陽』による確立期現代語の研究―『太陽コーパス』研究論文集―』博文館新社

井之口有一（1982）『明治以後の漢字政策』日本学術振興会

勝屋英造編（1914）『外来語辞典』二松堂書店

国立国語研究所（1987）『雑誌用語の変遷』秀英出版

国立国語研究所（2004）『分類語彙表　増補改訂版』大日本図書

土屋信一（2000）「明治・大正・昭和期の漢字使用―東京日日新聞を資料として」『国語文字史の研究』5、和泉書院

橋本和佳（2010）『現代日本語における外来語の量的推移に関する研究』ひつじ研究叢書〈言語編〉第86巻、ひつじ書房

深澤愛（2003）「漢字平仮名交じり文中における表記の選択―博文館『太陽』における外国地名の漢字表記と片仮名表記―」『日本語科学』第14号

山本彩加（2009）「近代日本語における外国地名の漢字表記――明治・大正期の新聞を資料として――」『千葉大学日本文化論叢』第10号

臨川書店編集部（2006）『DVD-ROM版婦人公論』臨川書店